

共同体の想像的回復：地域の自然誌・ 歴史の再発見とコミュニティの再生

川床 靖子 (大東文化大学名誉教授)

Reconstruction of an “imagined community”: Sharing regional geography and history involving the activation of a community

Yasuko KAWATOKO

はじめに

東日本大震災（2011年3月11日）の津波によって甚大な被害を被った宮城県の沿岸地域には全長約49kmに及ぶ運河がある。この貞山運河は、江戸時代の初めから明治にかけて木材や米の輸送を目的に整備された歴史的遺構である。運河沿いにはいくつもの集落が点在する。その一つが仙台市宮城野区岡田字新浜である。海岸に近い新浜では震災による津波の被害が地区全体におよび、多くの人命と共に住宅、田畑、海岸林、そして、運河に架けられた橋を失った。その後、復旧工事が急ピッチで進められ、震災から1年後には地区内の多くの場所で居住は可能になったが、もとの場所に返って住宅を再建する住民は少なく、震災後7年を経た現在でも世帯数は震災前の半数以下の70戸に止まっている。

世帯数および人口は激減したものの、新浜では、2014年頃から、被災住民による集落の、ひいては、個々人の再生に繋がる活動への模索が始まった。その一つが“故郷”新浜の自然と暮らしの歴史を学び直そうとする動きであった。一方、未曾有の災害の後、自然科学、人文科学を問わず多くの研究者、公的、私的機関の専門家、そして、ボランティアが災害復興への指針を得るべく被災地・新浜に参集した。地元、仙台の大学の自然科学や歴史学の研究者も震災直後から新浜に入り、動植物の死滅と再生の実態調査、或いは、400年以上の歴史を持つ海辺の集落、新浜の存続への営みの調査に参加した。また、環境団体、専門家、地誌・歴史の愛好家は貞山運河の生態学的役割を捉え直し、将来的には地域振興の資源として利活用することを目指して運河の実地調査を行った。

このような内外の動きのもと、2016、17年に、新浜町内会は地元の大学の里山、里地の自然を専門とするゼミと歴史学を専門とするゼミの教員並びに学生の協力を得て「新浜の自然と歴史の学習会」を開催した。参加者全員で海岸を歩き、運河をカヌーや小型和船で渡りながら新浜における生

物多様性の復活状況を観察し、新浜の自然と集落の存続を追求してきた先人の営みを学習した。この学習会には新浜の住民のみならず、地元の大学の教員とゼミの学生、貞山運河の利活用と新浜の復興に関心を寄せる市民団体と個人が参加した。学習会を重ねるごとに、新浜の住民を含めて参加者の間には、海、海岸林、砂浜海岸エコトーン、そして、貞山運河からの恵みを再生させることが里浜の、そして、そこに住む人々の復興につながるという共通認識、言い換えると、このような学習会活動を押し進めていく上でのオブジェクト(対象)が共同で作られ、共有されていった。

本論文では、新浜の住民にとって結果的には”disaster management(危機管理)”機能を果たしたものと推測される上記の“ふるさとを学習する”実践(「新浜の自然と歴史の学習会」活動)をエスノグラフィ(生き生きと詳細に描く意)する。新浜の人々は、大災害に直面して、なぜ、“ふるさとを学習する”ことを選択したのだろうか?彼らを“ふるさとを学習”へと突き動かしたものは何かを探る。そのことは、視点を変えれば、津波で多くのものを失った新浜の人々が、この実践への参加を通して、自らが生まれ育った土地と共同体のアイデンティティを再認識し、ひいては、自分が何者なのかという自らのアイデンティティをいかにして再構築していったのかを探ることになるであろう。

一方、新浜の事例は、災害と参加という視点、つまり、災害とそれとの遭遇を含む活動への「参加」の問題に目を向けさせる。一般論としては、参加を通じて創造的な出会いが生まれることもあれば、破滅的な出会いが生まれることもある。しかし、ここでは創造的、破滅的といった二分法的な視点で見るのではなく、活動への「参加」とそこで「交換」(柄谷 2014)を通じて、「想像の共同体(imagined community)」(ベネディクト・アンダーソン 1997, 柄谷行人 2014)が参加者によって作り出される可能性があるという仮定のもとに、災害と参加の相互作用を分析する。

被災住民のみならず様々な動機をもつ様々な人々を巻き込んだ新浜の“ふるさとを学習する”実践は、専門家(技術)集団によるトップダウン的アプローチによってではなく、ローカルな知識とアクターによって実現された。新浜を巡るそうした社会・技術的アレンジメント(人、モノ、装置の配置・編成のあり方)の形成を通して、この活動への参加者の間には新たな学習のエージェンシー(何かに向かう主体的な判断や欲求)、特に、地域共有の財産としての自然と歴史的資源を復興、保存し、そのようなものとして学習したいというエージェンシーが生まれていった。言い換えれば、実践に参加した様々な人、モノ、装置の相互作用を通して、このような集合的エージェンシーが形成され、かつ、「想像の共同体」としての“新浜”共同体が作られたと見ることができる。

ここで言う「エージェンシー(agency)」とは、人が主体的意志を持って行為し、考え、感じ、欲求を表現する能力を意味する(Kawatoko, Y. 2017)。私たちは、日常、様々な状況で、もっと何かができる、したいと思ったり、何か足りないと感じたり、プランを立てて目標の実現を目指したり、また、同情に動かされたり、惹きつけられたりする。こうした私たちが主体的に行い、考え、感じ、欲求を表現する能力をエージェンシーと呼ぶ。エージェンシー、言い換えれば、人が何を望み、考え、感じるかということにはまさに多様で複合的なものである。さらに、エージェンシーは主体を取り巻く環境、即ち、人、モノ、装置の配置、編成のあり方に依存して進化し、再構成される。

主体をめぐる人、モノ、装置の配置、編成のあり方をここでは「社会・技術的アレンジメント」と呼ぶ。エージェンシーの生成・変化と社会・技術的アレンジメントとの関係については、本論文構成の土台でもあるので、身近な事例を用いてもう少し詳しく見ることにしよう。

高齢者のスマートフォン使用を推進している三重県玉城町の「元気バス」プロジェクト（川床2013）では、バスの予約と緊急通報のシステムを組み込んだスマートフォンを65歳以上の高齢者に配布している。玉城町の社会福祉協議会が説明会を頻繁に開き普及を図ったことにより、今では町の75%以上の高齢者（約2500人）がこのスマートフォンを利用している。町の中心部から2キロ離れた地域で一人暮らしをする女性は足と腰の治療に月2回町の病院へ通う。スマートフォンでバスの予約をすると、自宅から2分ほどのバス停にバス（9人乗り）が来てくれる。治療の後は町で買い物をしてまたバスで帰ってくる。今では病院へ行くのが楽しみになったと彼女は言う。妻と二人暮らしの89歳の男性は5年前に運転免許証を返上し、以後、交通手段がなくて不自由な思いをしていた。しかし、「元気バス」のおかげで再び自分の都合に合わせて町に出かけることができるようになったと喜ぶ。目眩めまいを持病とするYさんも元気バスを利用して通院しているが、彼女にとってさらに有難いのはスマートフォンの緊急通報機能だという。スマートフォンにはGPS機能がついており、通報すると通報者の近くにあるスーパーや各種施設でその通報をキャッチし、一般の人でも駆けつけることのできる仕組みになっている。このように、玉城町ではスマートフォンを媒介に町ぐるみで高齢者の“元気な”暮らしをサポートしている。さらに、スマートフォンの利用を通じて知り合ったお年寄りたちは、時々誘い合わせて公民館に集い、スマートフォンにアップした孫や家族の写真、散歩で見つけた珍しい草花の写真などを話題におしゃべりを楽しむ。ときには、スマートフォンの新機能の使い方を教え合うこともあるという。

玉城町の高齢者は「元気バス」コミュニティへの参加を通して“元気”に暮らすことを生きがいにしてしている。このコミュニティは人、モノ、装置からなる異種混濁（ハイブリッド）の社会的空間と言い換えても良い。ここには、バスの予約システムと緊急通報機能を組み込んだスマートフォン（人工物）、スマートフォンの高齢利用者、元気バスシステムを共有しているバス運行者、病院、スーパーなど諸施設と一般の人々、元気バスプロジェクトの普及を図る社会福祉協議会などからなる社会的空間が構築されている。このような人、モノ、装置が作り上げるハイブリッドな社会的空間をアクターネットワーク理論（Callon, 2004）では社会・技術的アレンジメントと呼ぶ。「元気バス」コミュニティへの参加者たちの、“スマートフォンの使い方を習ってバスを利用したい”“これからは週に2回休まずに病院へ行きたい”“町に出て用事を足したい”“持病を心配せずに町へ出たい”“スマートフォンで高齢者仲間とつながりたい”“仲間と会って自慢話がしたい”“スマートフォンの新しい使い方を仲間におしえたい”といった主体的な欲求や判断、即ち、エージェンシーは、上に挙げた「元気バス」コミュニティの様々な人、モノ、装置からなる社会・技術的アレンジメントがあって初めて出現しているのである。繰り返しになるが、エージェンシーは主体を取り巻く環境、即ち、社会・技術的アレンジメントに依存して生成、進化し、再構成されるのである。

「元気バス」プロジェクトの事例に見るように、エージェンシーと社会・技術的アレンジメント

は共に所与、或いは、既存のものではなく、人間の活動に埋め込まれて作られ、進化し、かつ、変化する。本論文では、はじめに、新浜の“ふるさとを学習する”実践を可能にした社会・技術的アレンジメントの形成とその変化を歴史的観点を加えながら記述する。そのことを通して、次に、この活動に参加した人々による“ふるさとの自然と歴史を学び、コミュニティの復興につなげたい”という集合的エージェンシーの形成とその過程における人々の関係性、人々の繋がりの方を分析する。活動における人々のつながりの方の分析には柄谷行人(2014)の交換論を導入する。最後に、新浜の“ふるさとを学習する”実践を通して作られたもの、あるいは、志向されたものは「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン 1997, 柄谷行人 2014)と呼べるようなものだったのではないかということ議論する。

1. “こころ”の復興は“住まい”の復興から：復興へ向けて歩き出した新浜町内会

〈移転再建グループと現地再建グループ〉

新浜は仙台市の北東部、太平洋に面した宮城野区岡田に位置する。他の仙台市東部の町と同様に、新浜は東日本大震災の津波によって多くの人命(58名)を失い、田畑や家屋も壊滅的な被害を被った。新浜地区は岡田の中でも海岸に最も近く、津波被害が地域全体にわたった。震災直後、新浜の住民は小学校などでの避難生活を余儀なくされた。その後、復旧工事が進み、殆どの場所で居住は可能になったが、様々な事情で戻る世帯は少なく、震災から6年余り経過した時点でも世帯数は震災前(151世帯)の半数以下の65~70世帯、住民の数は220人に止まっている。特に、若い世代は戻っていない。どの被災地でも同じであるが、被災住民は生活の再建にあたり被災地を離れて他所の場所でそれを成し遂げるのか、地元に残まるのかという難しい判断が求められる。“ふるさとを学習する”実践(「新浜の自然と歴史の学習会」活動)をエスノグラフィする前に、新浜の人々はこの問題にどのように取り組んだのかを振り返ってみる。

震災の年から約2年半の間(2011年12月から2015年3月まで)、被災住民に向けて発行された震災復興地域かわら版『みらいん』の‘まちの語り場’コーナーでは、地域ごとに進められていた復興への取り組み、特に、住まいの再建と地域共同体の再建に関する住民による話し合いの内容が報告されている。それによると、新浜では震災の年の秋に町内会を含む各団体の代表や世話人会の人々を中心になって「新浜復興の会」を発足させた。当時、地元を離れてバラバラの地域・環境で生活する新浜地区の住民にとって“これからどこに住むのか”を決断することが緊急の課題であった。「新浜復興の会」は、移転再建を希望する住民と現地再建を希望する住民、双方の気持ちを尊重してきめ細かな活動を進めることに重きを置いて町民全体への報告会を頻繁に開いた。

震災から1年半を経過した頃、移転再建グループは移転先の協議を開始し、現地再建グループは仮設集会所の設置に向けて動き始めた。移転再建グループの活動は、移転候補地として久保野地区が浮上したことによって急速に進展し、2012年9月の会合では、各世帯の希望する区画、坪数の取りまとめが行われ、参加者は地図に大まかな希望地や坪数を書き込む作業を行った。2013年5

月中に宅地の売買契約がなされ、10月に起工式が行われて土地の造成工事の後、2014年5月に土地の引き渡しがあり、震災後3年数か月を経てようやく各家の建築が始まった。移転者は、新浜地区から16世帯、南蒲生地区から3世帯の計19世帯であった。新浜より内陸にある岡田小学校に通う子どもを持つ30,40歳代の世帯が中心で、津波を怖がる子どもに平穏な生活を送らせたいということが移転を決意した大きな理由であったという。

一方、現地再建グループは新浜町内会と連携して復興を目指すことを決め「新浜町内会復興部委員会」を立ち上げた。これ以降、委員会は毎月会合を開き、防災訓練、町内に残る空き地の売買条件の緩和、子どもの視点で通学路の歩道を確保すること、新浜町内女子会の活動支援、町内の空き地に集まる事業ゴミ対策等々、現地再建をめぐる様々な要望や課題を取り上げ、その都度、解決への行動を起こしていった。2014年には、津波で流された「町内会集会所」を新設すべく、他地域に新設された二つの集会施設を見学し、それら施設の間取りを基に原案を作成し、基本プランをまとめた。新しい「町内会集会所」は翌2015年の5月末に落成し、以後、新浜コミュニティ活動の起点として大きな役割を果たしている。

2. 「学習会」実践を導いた社会・技術的アレンジメントの形成

震災から2年経過した2013年の夏から秋にかけて、新浜町内に家を再建する住民が増えてきた。震災前の4割に当たる約60世帯が再び新浜で生活を始めた。この頃から町内会復興部会の後押しもあって「新浜町内女子会」が開かれるようになり、回を重ねるごとに参加者も増えていった。新浜では昔から“山の神”講と呼ばれた女性たちの集まりとそれに伴う行事が行われていた。しかし、講の中心的参加者であった高齢者の多くが今回の震災で亡くなったという事情もあり、女性の集まる機会が途切れていた。そんな折、“自宅の再建”は達成したものの、地域復興の道半ばで近所付き合いもままならず、家に閉じこもりがちになっていた女性たちから「何か集まる機会が欲しい」という声が挙がった。こうした相談を受けた町内会の後押しで「新浜町内女子会」が発足した。以来、町内の西組、中組、北組が交代で世話役となり、リースづくり、生花、正月飾りの講習会、健康体操やマッサージ体験など、会員が希望する活動を行っている。ある会員は「女子会は昔の講とは違って様々な年代の人が交わるから楽しいし、色んな考え方を知ることができる」と言い、町民相互のつながりの楽しさと必要性を再認識している。また、他の会員は「久しぶりに皆と活動をしていると、これから、ここに住む皆で一緒に町をつくっていかなきやいけないと感じるようになってきた」と言う。女子会を通じた繋がりだけではなく、暮らしの基盤である町を皆で作っていかうとする意識が女性たちの間に少しずつ醸成されていたことが窺える。

新浜を含む現在の岡田地区は、約400年前にも慶長の天津波（1611年）で大きな被害を受けたと伝えられている。こうした沿岸部一帯では、その後、仙台藩の直轄事業として新田開発が進められ、大きな石高を産出すると共にそれぞれ村（中野村、蒲生村、岡田村等々）として成立していった（菊池2016）。新浜はこのような歴史を持つ農業の盛んな土地であったが、東日本大震災の天津

波によって海岸線の木はなぎ倒され、田畑は全壊した。その後、瓦礫除去や復旧工事が行われ、農業の再開へ向けて準備が進められた。早いところでは、2013年に、瓦礫除去と除塩が完了した田んぼに稲が植えられた。「農業法人新浜協業組合」の平井組合長は、三年ぶりに稲作ができることを喜び、次のように語っている：「新浜は稲作で暮らしてきた農村だから、皆、稲を見ると心がなごむのさ。仮設住宅にいる人も新浜に来て稲を見たら、心を落ち着かせて前さ進む勢いをつくんでないかと思って」（「みらいん」2013年6月号）。2014年にはほとんどの農家が田植えを再開した。その年の8月末には、生産組合員21人が集合し、3年ぶりに農業用水路の草刈りを行った。組合員の一人で、震災後、農業や化学肥料を使わずにメダカと稲を一緒に育てることを試みている遠藤源一郎さんは、自身の日記に「海辺の集落の日常がもう一つ戻ってきた」と、その喜びを記している（遠藤環境農園2014.8.31）。

震災から4年後の2015年、新浜では現地再建希望者の家の再建が進み、田植えも再開されて日常的な暮らしが戻ってきた。それに伴い、復興町づくりへの町民の話し合いはより具体的な内容をめぐって活発になってきた。丁度その頃、町内会の新しい集会所が落成する。かつての集会所は海から1.3kmのところにあったが津波で流されてしまった。新しい集会所は兵庫県民の支援を受けて、かつての場所より300m内陸に建設された。情報コミュニケーション・ツールを備えたこの新しい集会所は、町民同士、或いは、町民と復興に支援と関心を寄せる研究者、役人、ボランティア、市民による様々な活動をオーガナイズする重要なアクターとして機能することになった。その年の8月には、この新しい集会所で70名余りの人々が参加して、海辺の暮らしを考える第一回ミニフォーラムが開かれた。

このミニフォーラムでは、午前中、参加者は海岸公園と貞山運河のほとりを歩き、震災による生態系の変化と運河の内陸側に出現した新湿地帯に生息する様々な生物を観察した。午後は集会所に集い、市や県による海岸と運河の復旧計画の概要を聞き、意見交換をした。続いて、新浜の“海に近い”特徴を活かした町づくりをテーマに参加者全員で話し合いを行った。新浜の住民からは「海との関わりが私たちの生活そのものだった」と震災前の新浜での暮らしの細々が語られた：昭和30年代頃までは集落総出で毎年春に土地と暮らしを守るため浜にマツを植えていたこと、貞山運河兩岸の松林でカマドや風呂の燃料とするため松葉さらいをやったこと、子どもたちは学校を休んで焚き付けのための“松かさ”拾いをしたこと等々。このミニフォーラムにおける活動の流れ、つまり、現地研修プラス町内会集会所での話題提供（講演を含む）プラス参加者全員での意見交換というパターンは以後の町内会主催の会において踏襲され、洗練されて定着していった。

同じ頃、後述の「ふるさとを学習する」実践に繋がる具体的な活動が新浜町内会のなかに生まれる。町内会の役員でメダカ米の生産者である遠藤さんの日記（前出）には、2015年の8月末に、「仙台藩の海岸林と村の暮らし」（菊池2016）を研究している東北学院大学歴史学科菊池教授を新浜の海岸林に案内し、津波で流されずに残った愛林碑（昭和28年建立）と八大竜王碑（海上安全を祈願して明治3年に建立）を見てもらったと記されている。目的は、両碑に刻まれている文言や建立者たちの氏名を詳しく調査して明治から昭和のはじめに至る沿岸の暮らしを知ることであった。そ

の年の11月には菊池教授とゼミの学生が八大竜王碑の拓本取りを行い、本格的に調査を始めた。以後、菊池ゼミでは様々な方法で新浜の歴史調査を行い、その成果を「新浜の自然と歴史の学習会」で発表することになった。また、遠藤さんら町内会の人々は、2015年から2016年にかけて精力的に「里浜復興フォーラム」（東北学院大学主催）に参加している。例えば、「激甚震災後の砂浜植生の再生と保全」フォーラム、「生態系サービスの享受を最大化する里浜復興シナリオ創出」公開学習会、「自然と歴史から考える里浜の未来」フォーラムなどである。遠藤さんは、これらフォーラムへの参加を通して、海や海岸林、貞山運河からの恵みを再生させることが里浜（新浜）の再生につながることを確信したと述べている。

以上のことから、「ふるさとを学習する」実践に繋がる社会・技術的アレンジメントは大震災から3年後の2014年後半から2016年前半にかけてつくられていったものと推測される。簡単に振り返ると、新浜町内に住み続けることを選択した人々の家の再建が進み、農家の田植えも再開されて新浜に緑の景観が少しずつ復活する。震災後、家の中にいることの多かった女性たちは「新浜町内女子会」の発足を機に、集落の集まりや活動へ積極的に参加するようになる。兵庫県民の支援を受けた町内会の新しい集会所が落成し、情報コミュニケーション・ツールを備えたこの新しい集会所は様々な活動の拠点になる。例えば、新浜の町民、および、新浜の復興に支援と関心を寄せる研究者、役人、ボランティア、市民など70名以上の参加者を集めて第一回ミニフォーラムがこの集会所で開催される。海辺の暮らしを考えるこのミニフォーラムでは、“海に近い”特徴を活かした町づくりをテーマに参加者による意見交換が行われ、新浜の住民からは震災前の新浜での暮らしの細々が語られる。この間、新浜町内会は地元の大学の里山、里地の自然を専門とするゼミ、および、歴史を専門とするゼミの教員と学生への積極的なアプローチを試みる。これがきっかけで、歴史学科ゼミでは新浜の歴史調査を行うことになる。また、新浜町内会の人々は地元の大学が主催する「里浜復興フォーラム」（東北学院大学主催）に積極的に参加し、海や海岸林、貞山運河からの恵みを再生させることが里浜（新浜）の再生につながることを学習する。このような、「新浜」を巡る人、モノ（事）、装置の社会・技術的かつ歴史的なコンフィギュレーション（配置・編成のあり方）が形成されることに伴って、新浜町内に住み続けることを選択した人々の間に“ふるさとをもっと知りたい、学習したい”というエージェンシーが作られていったものと考えられる。

3. 「ふるさとを学習する」実践をめぐる交換形態と関心の共同体

前章では、「学習会」実践に繋がる社会・技術的アレンジメントの形成がどのようになされたのかを詳しく見た。本章では、はじめに、「学習会」実践の内容を紹介する。次に、「学習会」実践への参加者（人、モノ、装置）の間にどのような“交換”（柄谷2014）、或いは、“つながりのあり方”が作り出されていったのかを詳しく見る。アクターネットワーク理論の創始者の一人、ラトゥール（1987）は、アクターネットワークとは、特定の対象や課題に異なるコミュニティや人々が関心を持つことで‘つながり’が形成されること、つまり、「関心の共同体」といえるものであり、かつ、

つながりの形成のためには、関心の翻訳が必要だと述べている。「新浜の自然と歴史の学習会」は、まさに、“新浜の復興まちづくりへの関心”の共同体を形成するための仕掛けであり、同時に、“まちづくりへの関心”の翻訳の手段だったと言い換えることができるかもしれない。翻訳の手段としての学習会がどのような内容で行われたのか、学習会への参加を通して参加者の間にどのような“つながりのあり方”、或いは、交換（Shiroma & Moro 2011, 上野他 2014, 川床 2017）が生まれたのかに着目して「ふるさとを学習する」実践を見ていく。因みに、ここでいう交換は、後で詳しく述べるが柄谷行人（2014）の交換概念に依拠する。

3.1 「新浜の自然と歴史の学習会」

3.1.1 学習会の内容：スケジュール

「新浜の自然と歴史の学習会」は東北学院大学等の教員とそのゼミ生の協力のもと新浜町内会が中心となって実施された。この学習会は2016年8月の一回目から2017年12月までに5回開催された。学習会には毎回40名から50名の参加があり、参加者は仙台市内の各所に置かれた案内のチラシや主催者のブログ参照、或いは、関係者による口コミで集まった人々であった。学習会の場所は新浜町内会集会所と新浜海岸及び貞山運河（新堀）周辺であった。

「学習会」は午前、午後の二部構成で、午前中は海岸及び貞山運河周辺での現地研修、午後は町内会集会所で現地研修の内容と関連する事柄についての調査・報告（教員・学生による）とワークショップが行われた。ワークショップでは新浜のまちづくりに向けて意見交換がなされた。現地研修では参加者はナビゲーターの説明を聞きながら里浜を散策し、海岸



写真1. 貞山堀を渡し船で渡り、海へ出る

林や海辺の生物の死滅と再生の実態を観察した。4回目の学習会では、参加者は大津波に耐えたクロマツの大木が残る堀を渡し船で渡り、流されずに残った八大竜王碑や愛林碑を訪れ、海辺の集落の暮らしと歴史に思いを馳せた（写真1）。毎回、現地研修の後、参加者は2015年に再建された新浜町内会集会所に参集し、地元の大学の里山・里浜の生態系を研究する教員及び海岸林と里浜史を研究する教員とそれぞれのゼミの学生による新浜の現地調査に関する報告を聞いた。これらの調査報告は参加者が実際に歩きながら見、聞き、触れたモノ、コト、風景と密接に関連する事柄であった。

3.1.2 学習会の内容：教員・学生による現地調査の報告概要

現地研修のナビゲーターでありゼミの学生の調査・報告を指導した東北学院大学の平吹喜彦教授によると、参加者が現地研修で歩いた新浜地区の波打ち際から水田に至る海岸一帯は、「海岸エ

コトーン」と呼ばれる海と陸と河川が接する境界域であり、東日本大震災の前までは、海水・汽水・淡水が入り交じり多様な生物の存在する生態学的に貴重な場所であった。しかし、未曾有の大震災は地形を変化させ、海辺の生物に大きな痛手をもたらした。一方で、震災直後から始められた生態学的調査によると、海辺の生物とそのハビタット（生活環境）は予想を超える速さと広がりですら回復しているという。海岸後背湿地の震災後の生態系を調査した学生らの報告によると、この湿地ではオミナエシ、ハマエンドウ、ハマショウブなどの植物の棲み分けが進み、他では見られない貴重な生態系が再生され始めているという。学生たちは、10 cm 単位で地面の凹凸を捉え、それに応じた植物の棲み分けを確定する方法（ベルトランセクト調査）を用いて湿地帯に 71 カ所の調査区を設定して植生調査を行い、こうした事実を明らかにした。

海岸林と里浜史を研究する東北学院大学の菊池慶子教授とゼミの学生は、津波による被害を免れた石碑、墓碑、仏像、社寺の調査、並びに、新浜の住人へのインタビューをもとに新浜の暮らしの歴史と信仰について報告をした。新浜の町内にある照徳寺の地蔵菩薩像は江戸時代後期から東日本大震災前までの長きに渡り女性たちの安産祈願の対象であり、出産間近の女性がかつては堤人形の菩薩を、近年では紅白の枕を寺に奉納する習俗があったという。この地蔵信仰を基に女性たちの講会として結成された地蔵講と山神講は、現在 50 代の女性を最後に散会したが、江戸時代から続くお嫁さんたちの支え合いの組織であった。庚申講と呼ばれる男性の寄合いや稲荷社の祭礼を行う若者組、女性たちの地蔵講・山神講に関連する石碑、言い伝えなど今に残る習俗を読み解くことを通して、学生たちは、先人の暮らしに根付いた信仰と助け合いの姿を明らかにした。

同様に、新浜集落における先人の営み、即ち、なりわい・家族・集落存続への互助と工夫を読み解く手がかりを与えてくれるのが、現地研修で参加者が見学した新浜のクロマツ海岸林と愛林碑、そして、八大竜王碑であった。現地研修の際にナビゲーター役を務めた菊池教授は次のように説明する：八大竜王碑は 1870 年（明治 3 年）に海上の安全を祈願して建てられたものであるが、碑には祭主や世話人の名前のほか献金（金 4 両）に協力した新浜の多数の住民の名前が平等に刻まれている。このことから、新浜は農業と共に前浜での鮒や鯛などの地引網漁を長年生業としていた半農半漁の集落であったことが分かる。愛林碑は、1953 年（昭和 28 年）、10 年の歳月をかけて完成した植林事業を記念して建てられたものである。碑文には、砂防林組合員が一致協力して様々な困難を乗り越え植林を達成した努力と、指導に当たった県職員への感謝が記され、「白砂青松のほとりを永久に我らの郷土を受継ぐ人々に伝えるため、この地に愛林記念碑を建てて海岸を守る精神を誇示する」と結ばれている。碑の裏面には砂防組組合長兼区長以下 78 名の新浜の組合員の氏名が刻まれている。

菊池教授 (2018) によると、仙台湾岸の植林の歴史は 17 世紀半ばに始まるという。仙台藩が植林を奨励し、御林（オハヤシ）を村で管理し、村民合同で植え継ぎ並びに枝葉と下草刈りなどを定期的に行って海岸林（クロマツ林）を“ヤマ”として共同利用した。そのことから昭和年代まで続いた村民総出で行う“松葉さらい”の慣行が生まれた。また、“ヤマ”は飢饉・凶作の時には村に開放され、松皮を食料にし、マツを伐採して換金することが許されたという。植林は近現代を通じ

て拡充され、国有林・県有林の植林事業に地元住民が雇用され、家族男女が作業に従事した。1942年以降は集落に「海岸林保護組合」或いは、「砂防林組合」が結成され、愛林碑に見るように、海岸林の保護、育成、火災防止活動、そして、砂浜の安定に向けて砂草観察と砂草苗の育成などの活動が組合単位で行われるようになった。2011年の東日本大震災によって海岸林は根こそぎ流され、現在は復旧作業が急ピッチで進められているが、震災以前の400年以上に及ぶ新浜周辺の海岸林と植林の歴史は八大竜王碑や愛林碑に語られているように、そこに住む人々に仕事と暮らしの糧を提供すると共に浜辺の暮らしを守るために活用された。その中で、里浜に生きた人々は集落の持続性を追求し、共同性と助け合いのための制度や組織を生み出していったものと考えられるという。

3.2 学習会への参加者と参加の動機、参加への期待と学習のエージェンシー

「新浜の自然と歴史の学習会」には、新浜の復興とまちづくりに関心と期待を持つ様々なグループと個人が参加した。

- a. 新浜町内会と町民：大震災による津波で大きな被害を受けた後、町内会を中心に復興まちづくりの指針をまとめ、まち歩きやワークショップを重ねてきた。地元の大学の専門家（上記の平吹・菊池教授等）が中心となった「生態系サービスの享受を最大化する里浜復興シナリオ創出プロジェクト」との共同事業としてこの学習会を開催した。町民は、学生のインタビューに応じて昔の暮らしを語るなど、教員と学生による現地調査に最大限協力した。学習会での現地研修ではナビゲーターを務め、運河を渡るための渡し船、カヌー等を準備した。町内会としては、学習会での意見交換を通じて、復興まちづくりの具体的なイメージを作り、皆で共有したい、また、貞山運河の活用や生物多様性の学習を通じて、多くの人に新浜に来て自然や歴史を体験してもらいたいと考えている。町民は、かつての海と共にあった暮らしを再発見し、保全・継承させることを期待している。
- b. 里山・里浜の生態学を専門とする地元の大学の教員とゼミの学生：生態系モニタリングと環境保全活動を続けてきた教員とそのゼミに参加している学生。教員は、生態学的に貴重なフィールドであり、かつ、住民の協力を得やすい新浜周辺を拠点にして、大津波に対する生態系の応答を記録し続け、未来に伝えたいと考えている。学生は、地域活動と結びついた卒論のテーマを探ること、地域活動に参加して進路へのアイデアを得ることを期待している。
- c. 歴史学（特に、海岸林と村の暮らし）を専門とする地元の大学の教員とゼミの学生：教員は、江戸時代中期から400年に及ぶ新浜を含む太平洋沿岸地域の海岸林（植林）の歴史とその他の歴史遺産を読み解き、地域存続のヒントを見つけて提案することを望んでいる。また、石碑や墓碑の読み取りという地味で骨の折れる作業が先人の営みや想いにつながる有効な方法なのだということを学生に知らせたいと考えている。学生は、自分たちが行った石碑や墓碑の読み取りが具体的にどのように現在や未来とつながるのかを知りたいと思っている。また、自分たちの調査・発表に対する人々の反応にも興味を持っている。
- d. 貞山運河研究所など市民団体と被災地の復興に関心を寄せる市民：貞山運河研究所は2014年

に環境団体スタッフ、大学関係者、専門家等によって、貞山運河を観光資源として利活用することを目的に設立された民間団体である。同研究所は新浜町内会と連携して海岸地区の自然・歴史の調査及びミニフォーラムを開催した。こうした活動を通して、“昔のようににぎやかな新浜にしたい”という町内会の思いと運河を含む地域自然を再生し、多くの人に運河に来て自然や歴史を体験してほしいという研究所の思いが重なり、「貞山運河の利活用による新浜の復興まちづくり」プロジェクトが立ち上がった。町内会と研究所の連携によるこのプロジェクトでは体験イベントとして「新浜の渡し船とフットパス」を実施し、小学生を含む多くの市民が参加した。このイベントへの参加者の多くが「新浜の自然と歴史の学習会」にも参加している。学習会への参加者の多くは、里浜を実際に歩いて自然とその再生力を観察することに大きな関心がある。また、一つの石碑にも集落の歴史、先人の暮らしが埋め込まれているという歴史学の一端に触れることにも大いに関心がある。

- e. 新浜の近隣の町の住人：新浜と同じように津波による甚大な被害を受けた沿岸部の住人。太平洋に面した仙台沿岸部の七北田川から名取川まで、直線距離で約9kmの間には新浜を含む5つの地区がある：南蒲生、岡田字新浜、荒浜、井戸、藤塚地区。貞山運河が流れるこれら5地区は、共に、浜辺の集落として400年以上にわたり存続してきた。津波によってこれまでの暮らしを失った人々は、これから自分たちの暮らしを、そして、町をどのように取り戻し、形作っていくのか、必死の模索を続けている。従って、新浜町内会の実践には強い関心がある。自分たちの町づくり、或いは、生き方にヒントを与えてくれるかもしれないという期待を持っている。

3.3 「ふるさとを学習する」実践で生まれた交換・つながりと集合的エージェンシーの形成

様々な動機と期待を持って学習会に参加した個人やグループの間にどのような交換が生まれたのか、「交換様式」(柄谷 2014)の枠組みを用いて明らかにする。マルクス主義哲学者の柄谷行人(2014)は、『資本論』の根本的な教義は、どんな社会も「交換」に基づく社会関係によって成立していることを説いたことにあると言う(p.153)。柄谷はこの見解を基に4つの交換様式という観点から世界の歴史を再考した。柄谷は国家を含む様々な共同体のあり方を交換様式の枠組みを用いて明らかにすることを試みたのである。そのことを通して、柄谷は、あらゆる社会構成体はこの4つの交換様式のヴァリエーション、異なる組み合わせであるという結論を導き出した。柄谷の言う4つの交換様式とは次の通りである。

交換様式 A = 贈与と返礼 (農業共同体の内部)

交換様式 B = 収奪と再分配 (封建国家)

交換様式 C = 商品交換 (資本制市場経済)

交換様式 D = A, B, C を越えるものとしての X (未来の交換形態)

柄谷は自身の交換様式論について二つの考え方から成り立つことを明らかにしている。一つは、たとえば交換様式 B (収奪と再分配) のように一見交換のようには思えないものを「交換」と考え

たこと、他の一つは、社会的交流（交わり、交通、交易、コミュニケーション）はある一つの交換的要素のみを含んでいるのではなく、複数の交換様式が混在していると考えたことである（p.9）。つまり、交換様式BといってもAの要素が全面的に消し去られているわけではなく、それらは根底で働いている。また、売買は昔から口約束や手形といった「信用」でなされてきたが、この信用を支えているのは互酬的（交換A）な義務であるというように、交換様式CにもAの要素があると考えるのである。

本論文では、社会的交流における4つの交換様式のあり方、並びに、複数の交換様式の混在という柄谷の観点を参照しながら、新浜の「学習会」実践（プロジェクト）では人、モノ、装置（自然、歴史を含む）の間にもどのような交換が生まれ、どのような繋がりが形成されたのかを参加者の発言をもとに分析する。はじめに、参加者の学習会における発言を新浜の町民、大学生、新浜近隣の住民、その他の参加者に分けて以下に記す。

〈新浜の町民〉

- ・60年以上新浜に住んでいるが、自生するハマナスを初めて知った。固有の植生が残るエリアに名前をつけたいらどうだろう。例えば、「新浜思い出の松林」とか。
- ・風呂も“松葉さらい”で海岸林から運んできた松の落ち葉で焚いた。そのため、うちの（新浜周辺の）松林はきれいだった。
- ・子どもの頃、荒浜の旭橋まで運河を友達5人でリレーしながら泳いだ。その帰り道、畑のスイカをこっそり食べた。
- ・震災後初めて海岸に来た。若い頃この海岸で地引網を引いて魚を採り、地区で分配して食べたことを思い出す。
- ・今日は震災後初めて海岸に行った。怖かったからというわけではないが、生活の再建が最優先で忙しく、行く機会がなかった。
- ・海との関わりが私たちの生活そのものだった。
- ・空気がうまい、海鳴りが良い、浜風が涼しい…新浜はいいとこだらけ。人もみんな挨拶し、気持がいい。
- ・各家庭の五右衛門風呂の焚き付けには「松かさ」を使った。学校を休んで子どもも拾った。学校のダルマストーブの焚き付けにもなった。
- ・地域の語り部が必要だと思った。
- ・貞山運河に新しい橋が必要であることを痛感した。
- ・貞山堀ではシジミや魚を採ったり、水遊びをした。
- ・震災後も続く典型的な里浜の新浜に誇りを感じた。
- ・愛林碑や八大竜王碑、庚申塔について、全然知らなかった。
- ・先人の苦労や共同作業を知って「がんばらなくては」と思った。
- ・若い人たちと学びたい。「若者の集い」を企画してはどうか。
- ・地元の間が地元を知ることが第一。学習会の意義は高い。今回の話をもっと多くの住民に聞いて

て欲しかった。

〈学生〉

- ・新浜の住民の方々から、直接、震災前のこと、震災後のこと、そして現在のことが聞けてよかった。
- ・愛林碑、八大竜王碑、寺社を巡り、先人の暮らし、自然と向き合う苦難、畏敬や団結の想いを感じた。
- ・いろいろ活動している人々の集まりに混ぜてもらい、様々な角度からの意見や感想を聞くことができた。
- ・震災で甚大な被害を受けながらも、地域復興へ向けて行動する皆さんの姿に感動した。
- ・これから何が起きるのか、地域づくりを実践的に学んでいきたい。

〈新浜近隣の住民〉

- ・今日は荒浜から参加したが、燃料、遊び、生活の話など同感しきり、挙げたらきりが無いほど。
- ・私らも松葉さらいをやった。ちゃんとさらわないとキノコが生えないこともあった。
- ・新浜の人の元気が感じられた。
- ・仙台周辺部にも新浜のように掘り起こせば豊富な史蹟があるのか。他所から見て特筆できる史蹟を調べてもらいたい。

〈その他の参加者〉

- ・新浜の歴史、震災後の歩みが学べてとても良かった。
- ・石碑、石像から新浜の信仰の深さを知った。
- ・菊池ゼミの今後の活動に期待する。昔の暮らしを聞き取ることは復興に貢献すると思った。
- ・自然の再生力、植物の生きる力にとっても感動した。特に、震災後、自然に芽生えた小さいマツやハマヒルガオがすごい！
- ・ハマナスと海浜植物が生育している貴重な場所に、囲いを作ってはどうだろうか。
- ・海岸では樹木も草花も再生している。名前がわからないので、名札をつけて欲しい。
- ・地蔵講、山の神講は、多少、経済的な連携の意味もあったのではないか。日常生活での相互扶助の役割についても具体的に調べていくと、より地域の特色が浮かび上がるのではないか。
- ・新浜の歴史について、新浜の若い世代にも知ってもらいたい。
- ・新浜の方々が要望されている運河を渡る橋の建設は、海岸と集落を結びつけるために必要なものだった。
- ・新浜の復興のためには、運河に橋を架けることが第一歩だ。
- ・愛林碑と八大竜王碑の間の連絡通路をつくることも必要だ。
- ・渡し船体験は、なかなか出来ないことなので、新鮮で面白かった。
- ・集落外への発信や集落外の人々との連携が不可欠。沿岸地域が一体となる取り組みになれば素晴らしい。
- ・大震災を生き抜いた動植物も歴史遺構も、心を暖かくし、復興まちづくりを支えてくれる大切な

宝物。未来へ伝えてゆくべきもの。

- ・若者の参加や地域と大学の連携がこれからも大切になると感じた。
- ・貞山運河の活用について、もっと何かできないか。

「学習会」実践への参加を通して生まれた各グループ間の交換は、基本的には、交換様式 A 「贈与と返礼」と見なし得るものであろう。新浜の町内会と町民は学習会の企画・実施に関わる物質的リソース、非物質的知識、技能、ボランティア的な仕事を学習会とその参加者に贈与している。その返礼として、彼らは学習会のフォーラムで自らの過去を語る場が与えられ、過去の思い出を蘇らせる機会を得ている。また、現地研修の場では自らのふるさとを改めて知る機会が与えられ、里浜のよさを再認識し、海と向き合う気持ちやふるさとへの誇り、地元との一体感を受け取っている。ある 60 代の男性は、“空気がうまい、海鳴りが良い、浜風が涼しい… 新浜はいいとこだらけ。人もみんな挨拶し、気持ちがいい”と語り、他の町民も“海との関わりが私たちの生活そのものだった”“震災後も続く典型的な里浜である新浜に誇りを感じた”と新浜の町民としての一体感やアイデンティティの感覚を得ている。

新浜の町民は、歴史遺構を案内し、インタビューに応じて震災前の暮らしを語るなど、教員と学生による現地調査に協力した。その返礼として、彼らは教員や学生の調査報告から先人の苦労や共同性のあり方を知ると共に、新浜のコミュニティとしてのあり方を振り返るきっかけを得ている。ある町民は、“先人の苦労や共同作業を知って、自分たちもがんばらなくてはと思った”と述べている。また、多くの町民は調査や発表における大学生の真摯な態度に接し、“もっと若い人たちと学びたい”“地元の人間が地元を知ることが第一。学習会の意義は高い。今回の話をもっと多くの住民に聞いて欲しかった”と、若い力への期待と若い世代との協働の可能性に浮き立つ思いを受け取っている。

一般参加者たちは、被災地新浜の復興を願い、町内会の企画するイベント（学習会）に積極的に参加することで新浜のまちづくりへの応援の気持ちを表明し、かつ、「学習会」実践成立の基盤を与えている。その返礼として、彼らは運河を船で渡るなどの新しい体験、自然の再生力に感動する気持ち、震災後の植生や生態系を観察する視点、里浜の景観を形作っているあらゆるもの（海岸林、堀、石像、石碑）にそのコミュニティのあり方と住人の暮らしの歴史が刻み込まれていることを知るという新鮮な驚き、歴史の面白さを感じる気持ちなどを受け取っている。参加者は口々に“新浜の歴史、震災後の歩みが学べて良かった”“自然の再生力、植物の生きる力に感動した”と述べている。ある参加者は、“大震災を生き抜いた動植物も歴史遺構も心を暖かくし、復興まちづくりを支えてくれる大切な宝物。未来へ伝えてゆくべきものだ”と発言し、他の参加者と共に町内会が企画した「学習会」活動の内容に満足し、賛同の気持ちを表明している。

町民の“若い人たちと学びたい”という発言や一般参加者の“学生さんたちが行ったような昔の暮らしを聞き取ることは復興に貢献すると思った”“若者の参加や地域と大学の連携がこれからも大切になると感じた”、或いは、新浜近隣住人の、“仙台周辺部にも新浜のように掘り起こせば豊

富な史蹟があるのか。他所から見て特筆できる史蹟を調べてもらいたい”という発言に見られるように、大学生の新浜でのフィールドワークとその調査結果の発表は「学習会」活動の内容を豊かなものにし、他の参加者へ大きなインパクトを与えている。その返礼として、学生たちは、新浜の住人はもとより多種多様なバックグラウンドを持つ人々から自分たちの調査・報告に対する意見や感想を聞き、学生としての自信を獲得している。そして、“これから何が起きるのか、地域づくりを実践的に学んでいきたい”という新たな学習のエージェンシーを形づくっている。

このように、主として交換様式 A（贈与と返礼）による社会的交流やつながりが作られていくなかで、参加者はそれぞれ自らの学習のエージェンシーを生み出している。更に重要なのは、参加者の発言の中に新浜の復興まちづくりに向けた集合的エージェンシーの萌芽が見てとれることである。先に紹介した、参加者の“大震災を生き抜いた動植物も歴史遺構も、心を暖かくし、復興まちづくりを支えてくれる大切な宝物。未来へ伝えてゆくべきものだ”という発言、“集落外への発信や集落外の人々との連携が不可欠。沿岸地域が一体となる取り組みになれば素晴らしい”“若者の参加や地域と大学の連携がこれからも大切になると感じた”という発言は、多くの参加者の思いを代弁するものであった。“学習会”活動への参加を通して、新浜の町民と町民以外の参加者の間に、“ふるさとの自然と歴史を学び、コミュニティの復興につなげたい”という共通の思い、言い換えれば、集合的エージェンシーが形成されつつあったと見ることができる。

4. 様々な交換を通して作られた「想像の共同体」

Shiroma & Moro (2011) は、柄谷の交換論を導入して小学校の総合学習での文楽の活動を分析した。その活動にはプロの文楽の演者、NPO や近隣の住民が参加した。参加者はこの活動の物質的リソース、非物質的知識や技能、ボランティア的な仕事を贈与し、その返礼として、地域への帰属感やアイデンティティの感覚を受け取った。この活動は感情の交換や交わりを伴いながら多様な人々が結びつき、地域の再活性化と文化財の共有へと進展した。Shiroma & Moro は、この活動で学校、プロの文楽士、NPO や住民による「贈与と返礼」の交換を通して作られた共同体を「想像の共同体」と呼んだ。

「想像の共同体」とは、政治学者のベネディクト・アンダーソン (1997) によって提唱された概念である。アンダーソンは、ネイション (国民) を「想像の共同体 (imagined community)」にとらえ、そのような想像の共同体が人々の心の中にいかにして生まれ、普及するに至るのかを考察した。アンダーソンは次のように言う「ネイションとはイメージとして心に描かれた『想像の共同体』である。いかに小さなネイションであろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ることもなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同のコミュニオンのイメージが作られている」(p.24)。かくして、「原初的村落を含め、それより大きい全ての共同体は想像されたものである」(p.25) と。1990 年代から 2000 年代にかけて、アンダーソンの「想像の共同体」は、主に先進国において「多文化主義」政策へと転化され、アイデンティティ・ポリティクスの最大の理論的支柱

となった。この流れに対して、柄谷は別の理論的対抗軸を示した。それがマルクスの思想、特に、「交換過程」を重視する視点であった。柄谷は、「ネイションは『想像の共同体』、すなわち、共同体 A (農村共同体) の想像的回復としてある」(p.166) と説く。柄谷の言う「想像の共同体」とは、上野直樹(2011)の解釈によると、「貨幣経済によって解体された互酬関係(贈与と返礼)による農村共同体を想像的に回復する人々の試み」(p.403)ということになる。ここで、「農村」といっても実体的に考えるべきではなく、商品交換的なものより互酬性が支配的な前資本主義的社会構成体ということである。本論文では、Shiroma & Moro(2011)と上野(2011)に依拠して、「想像の共同体」とは、様々なグループや個人による多様な交換を通して想像的に回復された仮想的な共同体、或いは、その仮想的な共同体を想像的に回復する人々の試みと定義する。

「ふるさとを学習する」実践は“新浜”共同体を想像的に回復する人々の試みであったと見ることができないのではないだろうか。2011年3月11日の大震災による津波被害によって地域全体が変貌してしまった浜辺の町、新浜で、ふるさとの自然、歴史、暮らしを学び直す活動を通して、“新浜”共同体が想像的に回復されている。現地研修でガイド役を務めた瀬戸勲さんは、「大津波に耐えて残った石碑やハマヒルガオ、ハマエンドウなど多様な植物は地域の宝だ。素晴らしいふるさとと先人の想いを未来に引き継いでいきたい」と強調する。学習会を企画・運営した町内会役員の遠藤源一郎さんは、「大学の先生とゼミの学生さんに石碑を詳細に調べてもらうことで明治始めの沿岸の暮らしが平等なものだったことがよく分かった。かつてのように、海や海岸林、貞山運河からの恵みを再生させることが里浜の再生に繋がるだろう」と語る。新浜の町内会長平山親悦さんは、「新浜の住人は貞山運河や海で魚を採ったり、クロマツ林できのこ狩りをしたり、豊かな自然の中の暮らしを昔から受け継いできた。新浜の良さを知った人がいずれは新浜に居住してほしい」と地域存続への思いを語る。この「想像の共同体」である“新浜”共同体は、新浜町内会と町民、地元の大学の教員とゼミの学生、市民団体と被災地の復興に心を寄せる市民、新浜近隣の住人等々による「学習会」活動への参加とそこでの様々な交換を通して作られたものとみることができよう。

おわりに

「新浜の人々は、大災害に直面して、なぜ、“ふるさとを学習する”ことを選択したのだろうか？」「彼らを“ふるさとの学習”へと突き動かしたのは何なのだろうか？」は、筆者が初めて新浜を訪れたときの率直な疑問であった。その後、学習会と各種イベントへの参加を通して得たこの疑問への答えは、「そこに‘自然と記憶’が残されていたから」ということであった。震災後も、新浜には長年人々の暮らしの一部であった海があり、運河があり、海岸林と自然の再生があり、なおかつ、先人の生きざまが刻み込まれた石碑、石像、墓碑、仏像、社寺が残されている。こうした新浜の住人を取り巻く人、モノ、装置のアレンジメント(社会・技術的アレンジメント)が“ふるさとを学習したい”というエージェンシーを生む要因となったのだろうと考えた。しかし、ここで忘れてはならないのは、エージェンシーと社会・技術的アレンジメントは共に所与、或いは、既存のもので

はなく、人間の活動に応じて形成され、かつ、変化するということである。ある空間に‘自然と記憶’が残されていたとしても、それをめぐる活動がオーガナイズされない限りそれは可視的にはならない。

大震災による津波で大きな被害を受けた後、新浜町内に住み続けることを選択した人々は町内会を中心にまち歩きやワークショップを重ね、「ふるさとを学習する」実践に繋がる社会・技術的アレンジメントを作ってきた。そのような活動を通じて地元の大学の里山・里浜の生態系を研究する教員及び海岸林と里浜史を研究する教員との協力関係ができあがり、「新浜の自然と歴史の学習会」が組織された。この学習会には新浜の町民のみならず様々な動機と背景を持つ人々が参加し、回を重ねるごとに新浜の‘自然と記憶’は学習会活動のオブジェクトとして可視化され、共有されていった。同時に、活動への参加を通して、新浜の‘自然と記憶’をもっと学びたい、伝えたい、残したいというエージェンシーが参加者の間につくられていった。新浜の‘自然と記憶’は活動に組み込まれることによって可視化、構成されたのである。

参考文献

- ・ Anderson, B. (1997). 増補 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行 (白石さや・白石 隆訳) 東京：NTT出版. (Anderson, B. (1983). *Imagined communities: Reflection on the origin and spread of nationalism*. London: Verso Edition, and BLB.)
- ・ Callon, M. (2004). The role of hybrid communities and socio-technical arrangements in the participatory design. 『武蔵工業大学環境情報学部メディアセンタージャーナル』5, 3-10. (川床靖子訳 (2006). 参加型デザインにおけるハイブリッドな共同体と社会・技術的アレンジメントの役割. 『科学的実践のフィールドワーク：ハイブリッドのデザイン』38-54. 東京：セリカ書房)
- ・ 遠藤環境農園ブログ http://blogs.yahoo.co.jp/endoh_g/rss.xml
- ・ 柄谷行人 (2014). 柄谷行人の思想 現代思想 vol.42-18 1月増刊号. 東京：青土社
- ・ 川床靖子 (2013). 空間のエスノグラフィー：文化を横断する. 東京：春風社
- ・ Kawatoko, Y. (2017). Forming and Transforming Weavers' Agency: Agency in Sociotechnical Arrangements. *Mind, Culture, and Activity*, VOL 24, NO.2, 129-142.
- ・ 川床靖子 (2017). 地域再生への仕掛けと多様な交換形態の発生：「被災農地にオリーブの森を！」プロジェクト再考. 大東文化大学紀要 第52号. p.37-53.
- ・ 菊池慶子 (2016). 仙台藩の海岸林と村の暮らシークロマツを植えて災害に備える. 仙台：蕃山房
- ・ Latour, B. (1987). *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers Through Society*. Harvard University Press, Cambridge Mass., USA. (川崎 勝・高田紀代志 訳 (1999). 『科学がつくられているときー人類学的考察』産業図書)
- ・ みらいん 震災復興地域かわら版 (2013年6月号 - 2015年3月号). 発行：仙台市
- ・ Shiroma, S., & Moro, Y. (2011). *Art and network in and around school: Re-organization of community association through traditional art activity*. Paper presented at 3rd International Society for Culture and Activity Research, Rome, September 8, 2011.
- ・ 上野直樹 (2011). 野火的活動におけるオブジェクト中心の社会性と交換形態. 『発達心理学研究』22 (4), 399-407.
- ・ Ueno, N., Sawyer, R., & Moro, Y. (2017). Reconstitution of Socio-Technical Arrangements: Agency and the Design of Artifacts. *Mind, Culture, and Activity*, VOL 24, NO.2, 95-109.